

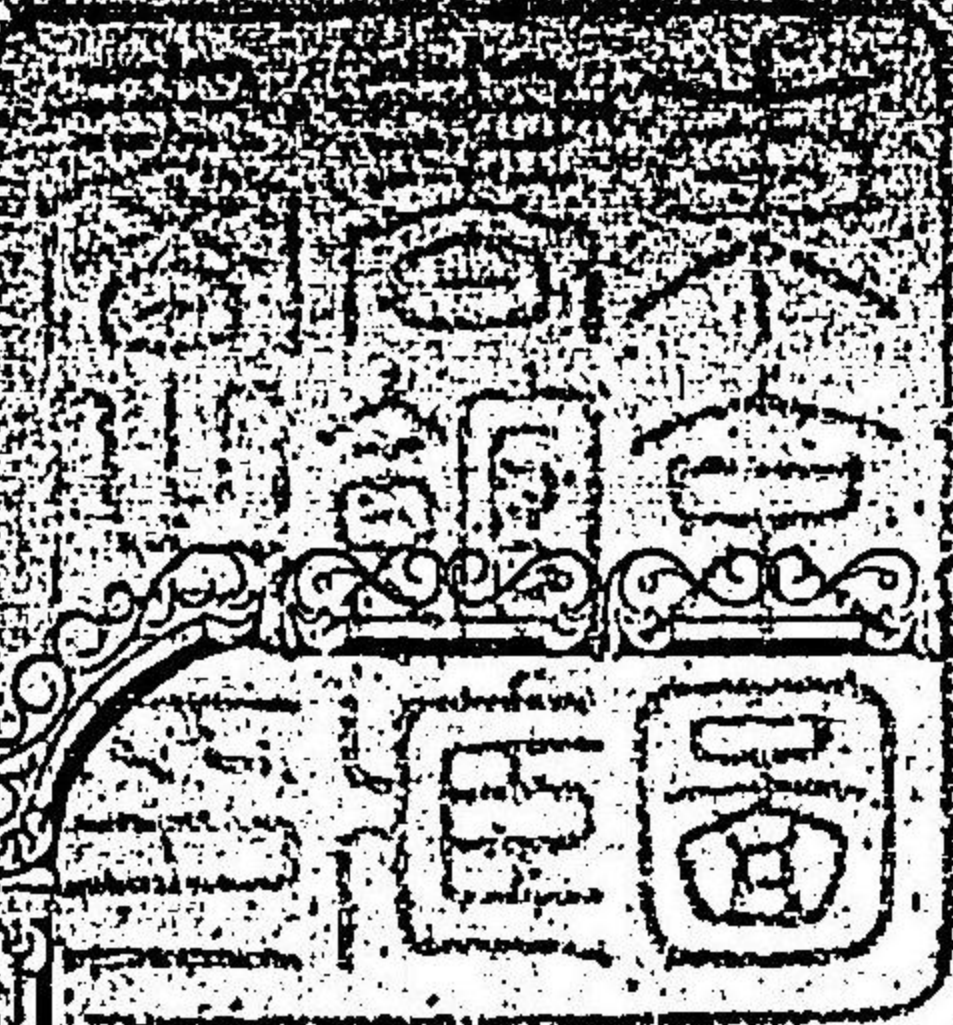
北村氏遺稿

67

143







北村氏遺稿

完

非賣品



金



孝

守



節

忠勝書



余承乏長崎縣學務始與北村君相識情交日密君嘗謂余曰吾談心事不諱者獨有子耳知己之言不可忘也君天性忠愛奉職尤謹明治十一年郡制之出也廳議以君爲杵島郡長命將下之前日俄以疾沒惜哉今修其遺稿以頌同交諸士讀者亦必知君之平生矣蓋君之學與行實不止于此而余之爲此舉未足以報其舊誼也君名勝成初稱仙三郎肥前大村人

明治十二年十月一日

周芳

壬生

光識



北村氏遺稿

子孫ノ教誡

北村勝成 著

勝成年甫ヲ十有一、家難ニ遭遇シ、祖母及慈母ノ鞠育ニ依テ、僅ニ生ヲ保ツヲ得タリ、長スルニ隨ヒ、親師ノ教訓ハ言ヲ俟ヌズ、戚族朋友辱知諸賢ノ薰陶ヲ以テ、大ニ其志ヲ堅フシ、平生家名ヲ再興シ、祿籍ニ復センコトヲ念慮トスルノ外、更ニ他ノ思望アルナシ、其間殆ト二十餘年、或ハ死生饑寒ノ地ニ處シ、或ハ意外ノ侮蔑ヲ受クルモノ亦少シトセズ、然レモ耳目ノ觸ル、所、事々物々皆悉ク感憤激勵ノ地トナラザルハ無ク、志氣愈堅ク、念慮益深ク、竟ニ家名ヲ再興シ、祿籍ヲ復シ、加之ニ明治ノ昭代



ニ際會シテ、朝官ヲ拜スルノ光榮ヲ荷フニ至レリ、蓋人ノ艱難ニ逢フモ、亦其幸ト云フヘキ歟、曾テ聞ク彼ノ舜帝ハ、耕稼陶漁ヨリ、以テ帝タルニ至ルマテ、人ニ取ルコ非ルモノナシト、聖人スヲ猶然リ、況ヤ吾儕小人ニ於テ豈ニ悉ク之ヲ人ニ取ラザルベケンヤ、余カ流離ノ間、之ヲ人ニ取テ、以テ身ニ裨益セシモノ、固リ少ナカラズ、今其記臆スル所ノモノ、凡三千二條ヲ摘録シ、以テ之ヲ子孫ニ貽ス、子孫其レ能ク之ヲ奉シ、敢テ傲慢懈怠ノ心ヲ生スルコトアル勿レ、是勝成ガ斯篇ヲ草スル所以ノ本旨ナリ明治九年十月、北村勝成識

余家難ニ遇ヒシ以來、家名ヲ再興シテ、祖先ノ靈ヲ慰メ、父ノ過失ヲ雪メ、祖母慈母ノ憂ヲ解シ、初念トシ、今日ニ至

リ敢テ怠ルコトナシ

余幼少ノ時、慈親ノ菓實ヲ與フル毎ニ、外色ノ美惡ヲ問ハズ、必其肉ノ碩大ナルヲ乞フ、一日母余ヲ戒メテ曰、汝無籍無産ニシテ、徒ラニ諸物ノ大ナルヲ欲スルモ、其實倣テ擧ケザレバ、復何ノ益アラソ、宜ク此心ヲ以テ、有益ノ實事ニ移スベシト、余竊ニ以テ、孟母斷機ノ嚴誡ト爲シ、之ヲ胸間ニ記セリ、是慈母ノ恩ナリ

余無籍トナルノ後、近鄰ノ少年、姓ハ詳カナラズ、名ハ貞八トシ、毎ニ余ヲ嘲テ云フ、汝ハ厠箒ナリト、舊藩ノ制、故アリテ、帳末ト云フ、又俗ニ厠ヲ手水ト云フ、帳末ト云フ、厠余此言ノ侮銘ト、訓相近シ、故ニ假テ以テ侮ルノ語トス、余此言ノ侮蔑ニ過クルヲ以テ、憤懣ニ堪ヘズト雖モ、敢テ言ニ發セズ、中心竊ニ一タヒ家名ヲ起シテ、此侮ヲ雪メ、ノコトヲ誓ヒ、誓



夜之ヲ忘ル、一ナシ

祖母嘗テ余ニ謂テ曰、家名再興ヲ期スルハ、甚々難クシテ且  
遠シ、聞ク波佐見村ニ、北村ヲ氏トスルモノアリテ、食祿若  
干ヲ有スト、若シ金ヲ出シテ、其ノニ分割ヲ乞ヒ、以テ名籍  
ヲ與サバ如何、舊藩士往々家祿ヲ分チ、余泣泣歔歔シテ之  
ニ答テ曰、兒不肖ト雖モ、苟モ生チ士籍ニ稟ケタリ、豈他人  
ノ祿ヲ仰ク一ナシ爲ンヤ、冀クハ大孺人暫シ見カ年ノ長ス  
ルヲ待タレシ一ナシ、祖母是ヨリ復此事ヲ語ラズ  
世或ハ余ヲ知ラザル者アリ、毎ニ余ニ謂テ曰、汝ハ何某ノ子  
ナリヤト、余之ニ答ヘント欲スルモ、父ノ過チ露サシ一ナシ  
恐レ、飲泣黙止スル一數回、只心ヲ苦シメ父ノ過チ雪メシ  
一ナシ是念ヘリ

無籍ト爲リシ後ハ、祖母慈母ノ縫織、及戚族ノ救助ニ頼リテ、  
僅ニ飢餓ヲ免ル、チ得タリ、故ニ金穀ノ乏シキハ論チ俟  
タズ、目下耕芸ヲ事トスト雖モ、旦暮唯自力ヲ以テ、祿ヲ復  
シ以テ祖先ノ祭案ニ供シ、以テ闔家ノ饑餓ヲ救ハシ一ナシ  
念トセリ

生計ノ困難ナル既ニ此ノ如シ、故ニ低頭シテ人ニ金穀ヲ仰  
ク一屢ナリ、母曰早晚カ財チ人ニ乞ハザルニ至ラバ、眞ニ  
以テ心ヲ安ニスルニ足ラント、此言平素耳チ離レズ、今日  
ニ至リ分外ノ俸給チ得、歡心ノ慈顔ニ動クチ見ル毎ニ、未  
タ曾テ朝恩ノ厚キニ、感涙ヲ催サシムアラズ  
安政二年乙卯、余始テ平民籍ニ加ハル、チ得、劔客齋藤氏ノ  
僕生ト爲レリ、一日雨アリ、偶然屐チ穿チ、師ノ擊劔具チ負



フテ、切通名<sup>地</sup>ヲ過キ、山口氏<sup>舊藩大目付</sup>ニ逢フ、氏余ガ履ヲ穿ツ  
 ナ見テ、大ニ之ヲ譴責ス、<sup>舊藩制、平民</sup>余恐懼罪ヲ謝シ、退テ  
 竊ニ終身ノ間、一タヒ履ヲ穿テ、小路<sup>土族ノ住居</sup>處ヲ小居ト云フヲ通  
 過スルヲ得ゾト誓ヒ、敢テ忘レズ  
 身ヲ齋藤氏ニ托スルヤ、田川師<sup>余カ幼時</sup>ノ余ヲ戒勵シテ曰、汝  
 彼門ニ入ラバ、宜ク僕婢ノ下ニ立テ事ヲ勉ムベシ、然ラザ  
 レハ必其志ヲ成ス可能ハスト、眞ニ余カ頂上ノ一鍼タリ、  
 其他此師ノ恩勝ケテ教ヘ難シ  
 余齋藤師ノ僕生タルヤ、常ニ履ヲ櫻ミ黻ヲ香キ、其他ノ賤業  
 亦爲サバ<sup>ル</sup>ヲナシ、而ノ其歴踐スル所ハ、悉皆事物ノ情態  
 ナ辨識スルノ紹介ト爲リ、益ヲ得ル鮮カラズ、是齋藤師ノ  
 恩ナリ

親戚ノ者一日庄氏<sup>舊藩參政</sup>ヘ、余ガ名ヲ通スルトテ、誤テ苗字ヲ  
 加ヘシ名刺ヲ呈セシコトアリタリ、他日庄氏余ヲ責ルニ、  
 輕忽ノ罪ヲ以テス、余素ヨリ親戚ノ誤書セシヲ知ラズト  
 雖モ、恐テ之ヲ謝シ、爾來一タヒ姓氏ヲ起サノト期シテ  
 志益堅シ  
 余劍客ノ隸生ニシテ、書ヲ學フノ暇ナク、加ルニ才ノ不敏ヲ  
 以テシ、手跡極メテ拙ナリ、一日宮原氏<sup>同郷ノ士</sup>余ヲ誡テ曰、  
 子ガ筆蹟、手ヲ以テ書スルモ、吾足ヲ以テ書スルニ及バズ、  
 余慚愧已ムナク、是ヨリ奮勵書ヲ學フ、後數年藩主余ガ拙  
 字ヲ問ハズ、擢テ右筆ノ列ニ加ヘラレタリ、是偏ニ宮原氏  
 策勵ノ恩ナリ  
 齋藤氏ノ塾生、谷四郎<sup>舊德山藩士</sup>ナル者アリ、槍術ヲ學フ、人ト爲



リ堅忍耐久、敢テ他人ノ及フ所ニ非ス、常ニ言フ、吾不敏ニシテ術ニ達スルヲ能ハズ、然レモ人ニタヒスルトキ、已レ之ヲ十タヒセバ、何ツ成ラサルナカラシヤト、乃毎夜素槍ヲ摩スルヲ數百、曾テ怠ルヲナク、遂ニ槍師タルヲ得ルノ允可ヲ受ケタリ、余竊ニ思フ彼レ斯ノ如シ、余ト雖モ志ヲ堅フシ久シキニ耐ヘバ、何ツ家名ヲ再興スルヲ得サランヤト、自ラ資ツテ以テ戒トス

余一日橋口氏舊藩ノ記ニ語ルニ、年來ノ志望ヲ以テス、氏曰國ニ常典ノ在ルアリ、冀望スベカチズ、余此言ヲ聞キ、痛哭措ク所ヲ知ラズ、退テ自思フニ假令國典アリト雖モ、精神一到セバ、何事カ成ラサラント、其後哀ヲ藩政廳ニ訴フ數回、而シテ王政維新ノ時運ニ遭遇シ、竟ニ士籍ニ復シ、父ヲ故

郷ニ奉スルノ恩免ヲ得タリ、嗚呼父ト別レテ以來、茲ニ二十餘年、流離困苦實ニ言フニ忍ヒザルモノアリ、而シテ今此幸慶ヲ辱ウス、一家ノ喜何如シヤ、天恩優渥、實ニ報スル所ヲ知ラス

安政戊午八月朔、余元締所舊藩ノ公廨ノ土間ニ召サレ、今留氏ヨリ苗字ヲ唱ヘ、帶刀ヲ許ルスノ奉書ヲ拜受セリ、實ニ君恩ノ庇スル所、感佩ノ至ニ任ヘズ、爾后益奮勵シ、一タヒ席上ニ於テ、奉書ヲ拜受スルノ榮アラソクシテ庶幾ス、其後數年逐次、藩廳拔擢ノ恩ヲ荷ヒ、之ニ加フルニ明治己巳三月、忝クモ太政官ニ於テ、雇士ノ命ヲ蒙ルヲ初トシ、續テ朝官ヲ拜スルノ光榮ヲ得タリ、嗚呼昔日ノ庶幾スル所ヲ顧念スレバ、天恩ノ優渥ナル、真ニ夢幻ノ如シ



余藩士ノ末列ニ加ハリ、既ニシテ又東行ノ命ヲ拜ス、川原氏  
舊藩余ヲ誠テ云フ、子職ヲ江戸ノ藩邸ニ奉ス、夫レ江戸ハ、  
天下ノ大都會ニシテ、百事意ノ如クナラザルナシ、然レモ  
繁華ノ人ヲ誤ル、古來其例少ナカラズ、子苟モ前途ニ望ミ  
アラハ、十歲固圍ノ思ヲ爲シ、敢テ他ヲ願ル勿レ、余此言ヲ  
以テ、始終韋弦ノ箴言トス

余藩ノ江邸留守某、附屬ノ筆吏タリ、一日淺田氏舊藩執政、後  
舍ニ屏ニ使シ、買人ノ一良刀ヲ販クニ會フ、余之ヲ欲シテ、  
自ラ禁スル能ハズ、刀ノ撰ムベキヲ思フハ、乃問曰、閣下若  
シ此ヲ買ハサレバ、願シハ僕ニ買フヲ許ルセ、氏艷然ト  
シテ曰、咄、汝木刀モ猶過分タリ、何ソ此ヲ用ルヲ爲ソ、余  
心中慨然トシテ思フ、抑士ノ刀ヲ帶ルハ、國家ノ用ニ備フ

ルノミ、何ソ貴賤ヲ論セソ、乃竊ニ刀舖ニ約シ、遂ニ衣服ヲ  
典シテ之ヲ得タリ

余竊カコ思フ所アリ、畫工早瀬氏ニ屬シテ、楠公別子ノ圖ヲ  
寫サシメテ、之ヲ表装セリ、氏偶之ヲ淺田氏前條ニニ語ル、

淺田氏乃余ニ謂テ曰、汝カ卑賤何ソ畫軸ヲ弄スルヲ爲  
メ、吁淺田氏余カ眞意ノ屬スル所ヲ知ラズ、然レモ余甘ソ  
シテ其折辱ヲ受ケタリ

余無學ニシテ絶テ事ヲ知ラズ、一日繪本楠公記ヲ讀ンテ、竊  
カニ王室ノ尊ハサル可カラサルヲ思フ、其後楠木誌、岳忠  
武王集ノ類ヲ見テ、志益堅シ、凡人タル者ハ、必此等ノ書ヲ  
讀マヌンバアルベカラズ、子孫其レ之ヲ勉メヨ

余無學ノ故ヲ以テ、漢籍ヲ讀ムヲ能ハズ、徒ラニ草双紙軍書



等ヲ讀ミシモ、亦益ヲ得ル少ナカラズ、是ニ於テ始テ學問  
ノ爲サトルヘカラザルヲ悟レリ  
一日同志數輩ト郊行シ、其各紀行ヲ書スルヲ見テ、大ニ我無  
學ニシテ、一字タモ記スル能ハザルヲ愧テ、人間作文ノ一  
日モ闕クベカラザルヲ知ル

余江邸ニ在テ、一日大問眞顯記ヲ閱ミシ、山崎戰鬪ノ事跡、數  
冊ニ涉テ、甚繁冗ナルヲ厭ヘリ、他日友人山口氏當時漢學  
學助ニ語ルニ、此事ヲ以テス、氏曰、日本外史ハ、此戰ヲ記ス  
ル、僅ニ數行ニ盡クセリ、是ニ於テ始メテ漢文ノ簡便ナル  
ヲ曉リ、斷然稗史小説等ノ俗文ヲ讀ムヲ止メ、漢文ヲ學ハ  
ンコトヲ念トセリ、此時齡既ニ二十有五、竊ニ其悔ルノ晚キ  
ヲ歎スルモ及ハズ、又日本外史ヲ得ルモ之ヲ讀ム能ハズ

ズ、故ニ愧テ棄テ、人ニ就テ學ハンコトヲ思ヘリ  
友人井石氏今陸軍大尉岩崎氏今大藏省六等出仕曩ニ書生タリシ時、一日  
其書窓ヲ訪フニ、机上ニ八大家文讀本アリ、余取テ之ヲ繙  
クニ、訓點ヲ下サズ、故ニ一行モ讀ムヲ能ハズ、殆ト盲者ノ  
如シ、嘆息數回、始テ無点本ノ讀マザルベカラザルヲ悟了  
ス

余江邸留守ノ筆吏タリシ時、一日書生數名、邸内ニ來會シテ、  
漢書ヲ輪講セリ、余モ亦在テ講席ノ側ヲニ侍シ、之ヲ聽ク  
ヲ得テ、更ニ他念アルヲ無シ、時正ニ炎暑ニ際シ、留守ノ同  
僚起居ヲ訪フ者數輩來レリ、余之ヲ知ラズ、暮ニ及テ歸レ  
ハ、留守大ニ勤務筆吏ハ平素紹介使ヲ缺クヲ責ム、余恐愕  
謝スルニ道ナシ、留守モ亦余ガ今日ノ過チ、他ノ嗜好ニ出



テザルヲ憫ミ、置テ問ハザルノミナラズ、爾后深夜早朝ヲ以テ書ヲ讀ムヲ許セリ、是偏ニ留守ノ恩ナリ

余江戸ニ祇役スル八年、慶應中其勤勞ヲ賞シ、家祿若干ヲ賜ハリ、而シテ歸藩ノ命アリ、歸ルノ後、又吏局ニ出入ス、常ニ以爲ク右史ノ職タル、文學ニ長シ、博覽多識ニ非ザレバ能ハズト、然レモ沒籍以來、未タ一日モ蠶舍ニ學フヲ得ズ、徒ニ固陋ノ獨學ニ從事スルノミ、故ニ歸來藩校入學ノ志アリ、之ヲ同僚ニ謀レモ、其衆ニ類セザルノ奇舉ナルヲ唱ヘテ、不可トナシ、之ヲ朋友ニ謀レモ、亦之ヲ善トセズ、於是乎竊ニ他方遊學ノ志ヲ抱キ、鬱々トシテ時機ヲ待ツト久シ、後數月藩命ヲ以テ、京師ニ祇役シ、竟ニ其志ヲ果スヲ得ズ、爾後逐年世運變換シ、今日ノ世態ニ至リ、朝官ヲ忝フシ、益々

學文實務ノ偏廢スベカラザルヲ曉レモ、日暮テ道遠ク、加ルニ身病痾アルヲ如何セシ、然レモ未ク須臾モ其念ヲ絶ツト能ハズ

余ガ貧賤ナルヤ、常ニ書籍ニ乏キヲ嘆セリ、爾后數年ナラズシテ、俸祿微身ニ餘リ、大日本史通鑑等ノ浩帙、及ヒ他ノ書籍等ヲ得ルニ至リ、往昔ヲ回顧シテ、天恩我ニ及フノ一方ナラザルヲ知ルナリ

余曾テ隊伍ニ編セラレ練兵場ニ出ツ、教師其技ノ未熟コシテ、伍列ニ堪ヘザルヲ以テ、命シテ之ヲ脱セリ、爾來日夕英式ヲ習練シテ止マズ、後數年、徵兵ノ員ニ加ハリ、圖ラズ御親兵ノ小隊司令ニ拜セリ、是偏ニ教師某戒勵ノ恩ナリ

譯書中、立志編、育英新編、尤有益ニシテ、奮勵ノ心ヲ増スヲ覺



フ、子孫必此等ノ書ヲ讀マザルベカラズ  
 余中年、文章軌範、陸宜公奏議等ヲ讀ミ、始テ世ノ臣子タル者、  
 苟モ國家ニ益アラソクヲ思ハ、忌憚ナク志ヲ盡シ、上言  
 セザルベカラザルヲ曉リ、管見ト雖モ、愧ヲ棄テ、上書ス  
 ルコト、既ニ十餘度ニ及ヘリ  
 渡邊兩氏今大坂府權知事長岡氏今文部省八等出仕先年在京ノ時、常ニ  
 余ヲ誘導シテ、翻譯書ヲ讀マシム、余是ヨリ數十部ヲ閱シ  
 テ、少シク文化ノ一端緒ニ就キ、聊固陋ノ面目ヲ革ムルニ至  
 レリ、是偏ニ數氏ノ恩ナリ  
 在京ノ時、楠本氏今新潟縣令ト頭髮ノ談ヨリ、腦髓ノ論ニ及ヒ、人  
 身健康ノ利害等、懇誨ヲ受ケ、始テ大ニ感悟スル所アリ、因  
 テ願フニ、人タルモノハ、縱令書ニ依テ事物ノ概略ヲ辨知

シ得ルモ、亦必有力ノ人ニ就テ、己カ思考ノ及ハサル所ヲ  
 研窮セザルベカラズ  
 余聞ク、亡祖父常ニ田園ノ家産ニ関クベカラザルヲ言ヘリ  
 ト、今コレヲ而ノ祖先ノ遺訓、能ク人生ノ實務ニ適スルヲ  
 發曉スルヲ得タリ、凡人タルモノハ、僥倖ノ利ヲ欲セズ必  
 恆ノ産ヲ有シ、恆ノ心ヲ保テ、隨テ又國益ヲ謀ラザルベカ  
 ラズ、子孫其レ能ク心ヲ斯ニ庸ヒヨ



文

誠己

凡士之所<sub>レ</sub>可<sub>レ</sub>學者文也、所<sub>レ</sub>可<sub>レ</sub>嗜者武也、有<sub>レ</sub>文而無<sub>レ</sub>武尙可矣、有<sub>レ</sub>武而無<sub>レ</sub>文亦尙可矣、無<sub>レ</sub>文無<sub>レ</sub>武、徒食<sub>二</sub>恩祿<sub>一</sub>豈可<sub>レ</sub>不<sub>レ</sub>耻<sub>二</sub>於農商<sub>一</sub>哉、夫學<sub>レ</sub>文講<sub>レ</sub>武、各以<sub>二</sub>其所長之才藝<sub>一</sub>、報<sub>二</sub>邦家無限之恩澤<sub>一</sub>、是固士之職也、余幼離<sub>二</sub>於父<sub>一</sub>、流寓困苦、不得<sub>二</sub>逞志於文武之業<sub>一</sub>、今而思<sub>レ</sub>之、冷汗溢<sub>レ</sub>背、不知<sub>レ</sub>所<sub>レ</sub>言、嗚呼、日月不<sub>二</sub>與我偕<sub>一</sub>、天暮而途猶遠、雖然、精神之所<sub>二</sub>一到<sub>一</sub>、何事不<sub>レ</sub>成、日夜孜孜、勉強而不敢怠、豈不<sub>レ</sub>得<sub>二</sub>報國恩之萬一<sub>一</sub>耶、書以自誠

送深澤勝算歸鄉序

予將莫邪古之良劍也、然不加<sub>二</sub>砥礪<sub>一</sub>、何與<sub>二</sub>鈍刀<sub>一</sub>異焉、騂騮騏驥古之良馬也、然無<sub>二</sub>善御者<sub>一</sub>、徒不<sub>レ</sub>過<sub>二</sub>踉蹌<sub>一</sub>耳、人亦然、夫人非<sub>二</sub>生而賢者<sub>一</sub>、



必也求良師而師之、擇善友而友之、勉勵切磋、講文學武、然後始有所爲也、孔子曰、吾嘗終日不食、終夜不寢、以思無益、不如學也、聖人猶然、况於吾人乎、方今皇道陵夷、夷狄跋扈、苟有志於國家者、豈得能一日安然哉、我友深澤勝算、遊于江戶、有年於茲矣、文學兵法大有所得、今將歸鄉、勝成臨別且告曰、衣錦歸故鄉、蓋謂學若德、有可誇視於一鄉者耳、如勝算、真可謂不愧是語者、嗚呼勝算歸鄉之後、提撕吾藩文武之士氣、必能應變而不窮、處急而不錯、豈止于將莫邪之斬、硬堅驕驕之致千里之比乎哉、勝算其勉旃

賴渡邊參政乞哀書

勝成 恐惶再拜、上書參政渡邊公閣下、勝成聞父不爲父子不可不以不爲子、勝成父某嘗犯國大典、其罪固大矣、勝成安可不盡子

之道、而請之救解、勝成甫十有一歲、雖於父、零丁孤苦、備賴祖母及母之鞠育、得保生、及長爲劍客齋藤氏之僕、學劍數歲、而技術未敢熟也、安政己未事聞于官、特美其志、始列於士籍、更拜書記、而祇役于江都八年、慶應丙寅、又擢右史、賜以俸祿、嗚呼國恩之渥、富嶽是低、琶湖尙淺、勝成唯恐無所報而已矣、願勝成夙遭艱難、座不安、席食不甘味、目視靡曼之色、心不悅之、耳聽鐘鼓之音、意不快之者、殆二十餘年、是無他、以下父在他鄉、未得歸家之恩赦也、昔漢淳于公得罪、其女緹縈、請下爲官婢以贖父罪、漢文憐之、遂罷肉刑、今勝成螻蟻之誠、雖萬々不及緹縈、然志之所存、則無所愧矣、願閣下察焉、勝成側聞朝廷既有大赦之令、勝成竊喜父子相見互開積年之愁懷、蓋在近乎、而爾後數旬未得命、勝成甚惑焉、伏惟閣下以仁愛宏達之量、盡力於公事、言靡不聞、謀靡不



用、願閣下愍<sub>二</sub>勝成愚誠、願<sub>二</sub>勝成微衷、爲<sub>二</sub>勝成一請<sub>二</sub>於主公使<sub>二</sub>父得<sub>三</sub>歸家而保<sub>三</sub>餘年、夫得<sub>レ</sub>隴望蜀人之常情也、况於<sub>二</sub>子慕<sub>二</sub>父手、勝成曩荷<sub>二</sub>高恩而今又猥訴<sub>二</sub>此情、自知<sub>二</sub>罪大、然勝成非<sub>三</sub>敢有<sub>二</sub>他意、聊不過<sub>レ</sub>欲<sub>レ</sub>盡<sub>二</sub>爲<sub>二</sub>子之道<sub>二</sub>耳、惟閣下熟察少垂<sub>レ</sub>憐焉、敢冒<sub>二</sub>瀆威儼<sub>二</sub>、不勝<sub>二</sub>激切屏營之至、勝成頓首再拜

題名護屋城古瓦

賤而不顧者瓦礫是也、貴而不棄者金玉是也、雖然瓦礫時而甚貴、金玉時而甚賤、所以然者蓋有<sub>レ</sub>以也、明治十一年四月、余獲<sub>二</sub>此瓦於名護屋城趾<sub>二</sub>矣、嗚呼此碎瓦何以貴<sub>レ</sub>之手、余非<sub>レ</sub>貴<sub>二</sub>質之堅密、而色之蒼潤也、乃慕<sub>二</sub>豐公之英才雄畧而貴<sub>レ</sub>之也、抑公之英才雄畧、僅因<sub>二</sub>土中一片之碎瓦<sub>二</sub>而慕<sub>レ</sub>之貴<sub>レ</sub>之、不<sub>二</sub>亦哀乎、雖然此碎瓦、豈可<sub>レ</sub>與<sub>二</sub>金玉同視<sub>二</sub>哉

詩

丁卯盛夏望富岳

盛夏看來便是冬、雲間積雪玉芙蓉、波山鏤嶺皆塊土、真是東洋第一峯、

暮秋山居圖

無<sub>二</sub>是樊川詩句畫<sub>二</sub>、半溪紅葉勝<sub>二</sub>春花、晚來應<sub>レ</sub>有<sub>二</sub>停車客、石逕白雲認<sub>二</sub>數家、

溪夜

溪風吹<sub>レ</sub>月入<sub>二</sub>孤亭、霜氣稜々壓<sub>二</sub>戶庭、枕上方知水既合、潺湲不<sub>レ</sub>似<sub>二</sub>晚來聽、

吊飯山先生

連山暮色起<sub>二</sub>妖氛、何物兇夫漫賊<sub>レ</sub>君、英骨縱爲<sub>二</sub>刀下鬼、丹心留得



九重聞

送友人東行

萬里雲山客路遐、河梁已見夕陽斜、憶君墨水春風晚、肥馬銀鞍  
踏落花、

藤枝途中

幾重峻嶺幾流川、晨上肩輿暮上船、萬里雲烟看欲盡、吟心却想  
故鄉天、

入鎌倉

自然城郭海兼山、便是源家函谷關、千歲不消英傑恨、餘氛留在  
怒濤間、

戊辰孟春、奉京師祇役之命、將發、會有父君大赦之恩、有感  
而賦

孤苦零丁二十年、一朝逢赦舉家全、滿堂瑞氣春風暖、稽首拜恩  
還拜天、



歌

○或る書をよみさどる事のあまて  
業はまゝたらぬと常に思ふへし

足れりとおもふもたらぬ思へは

○田付氏に狂歌に對ふ

今日は關明日は風早日比室津

港めぐりも今はうるさ

○明らかに治れる八の年の神無月末の八日のあけ

かゝ夢の中に次の句を

ならぬとは盡さぬほとこのれりれ言

盡しく成らぬ事はあらくな

○和田のみさきにて故さとを思ひやりて



おほる夜に和田のみさきを舟出して

いつかあかめむ故郷の花

○或人の國へ歸るを送るとて

にこる世によし生るともまき島の

清き心をさみわするなよ

○富士川を渡りし時感する事のありて

中々に高き深山の谷間より

流れし水と清くそあまける

○或日書をよみさとる事のありて

道はたゝ近きみあるをいらそして

遠きにあさるこゝろねろさよ

○軍務官に入るとき貞松氏を贈る

國の爲め水にも火にも入らぬやと

おもふこゝろをとほさくらめや

○己巳六月東京にて新井氏に贈る

去年の春新井氏に君御國の爲を思ひ玉ふ真心のあら

はれやらてはからそもねちけ人のさかまらにあり

てとらはれの身と爲りたまふをうらみもやらてなほ

一すちに大君をたふとみさまひやまとうたから歌

なとものしたまひーを見て其御こゝろをおもひやり

なみたとゝもよよみたりーにのちやゝ光りおほへる

雲男もいつまの晴れて今は貴き位に登りたまふを賤

の男もうれーされあまひしをれもて祝し奉る

いつしがにおふへる雲もふき晴て



いさ得し高くあふく今日哉

○己巳の冬始先て種基の君にまみねしより外なまぬ  
好みたまはる師とも兄ともあふき善を得る數々おほ  
かりしにこたひはあらすも老の母れいたつきを愛へ  
仕を致して故郷又歸らん事を告いふ歌よみてたまひ  
し之嬉しどもよろこばしともいはんかたなくおろか  
なる一言をいりて報ひ奉る

たとへ身は千里の國を隔とも

なとわそるへき君かむつひを

○飯山先生を吊ふとて

宵の間の嵐も花は散ぬれど

香はよむひけり雲の上まで

○開けねと笑ふ人に答ふ

開にし花れ敷にの入らぬとも

實のらぬ梨のさくひならめや

眞さかまに木々の下枝は咲ぬれど

猶も梢にふくむひと枝

○おもひを述る

武士の守らん物のまきしまの

道と一きけはおくもわけみん



○俳句

元日や人のこゝろも廣くなる

身よしむもうれしかりけり春は風

かくれ家も世にいられけり梅の花

鶯の聲いさましきあしたかな

野も山も静かに見へて今日の月

一とせと夢のやうあり年の暮

○戊辰の春

幾千代もかゝらぬ君の恵かき

○己巳の年數度富士は麓を過りて

いつ見てものとけき富士の高根かな



北村氏遺稿 終

余始獲接北村君於師範校中一見識其温厚閑雅有臨事  
必有為之量也時君奉職縣廳余未及辱交知而君損館舍  
後閱遺稿考其德行深信素見之不愆焉豈可勝憾念哉今  
幸與壬生校長之校斯稿以得不負我所追思矣君而有知  
則冥々之中亦必將有所許於余不佞也邪書以為跋

島原處士 吉家 賚撰



洲  
林  
氏  
遺  
稿

[Large empty rectangular frame]

自  
註  
卷  
一

第  
一  
回

第  
一  
回

第  
一  
回

第  
一  
回



67  
113

明治十三年一月十二日出版局

編輯兼出版人

長崎縣長崎區今町

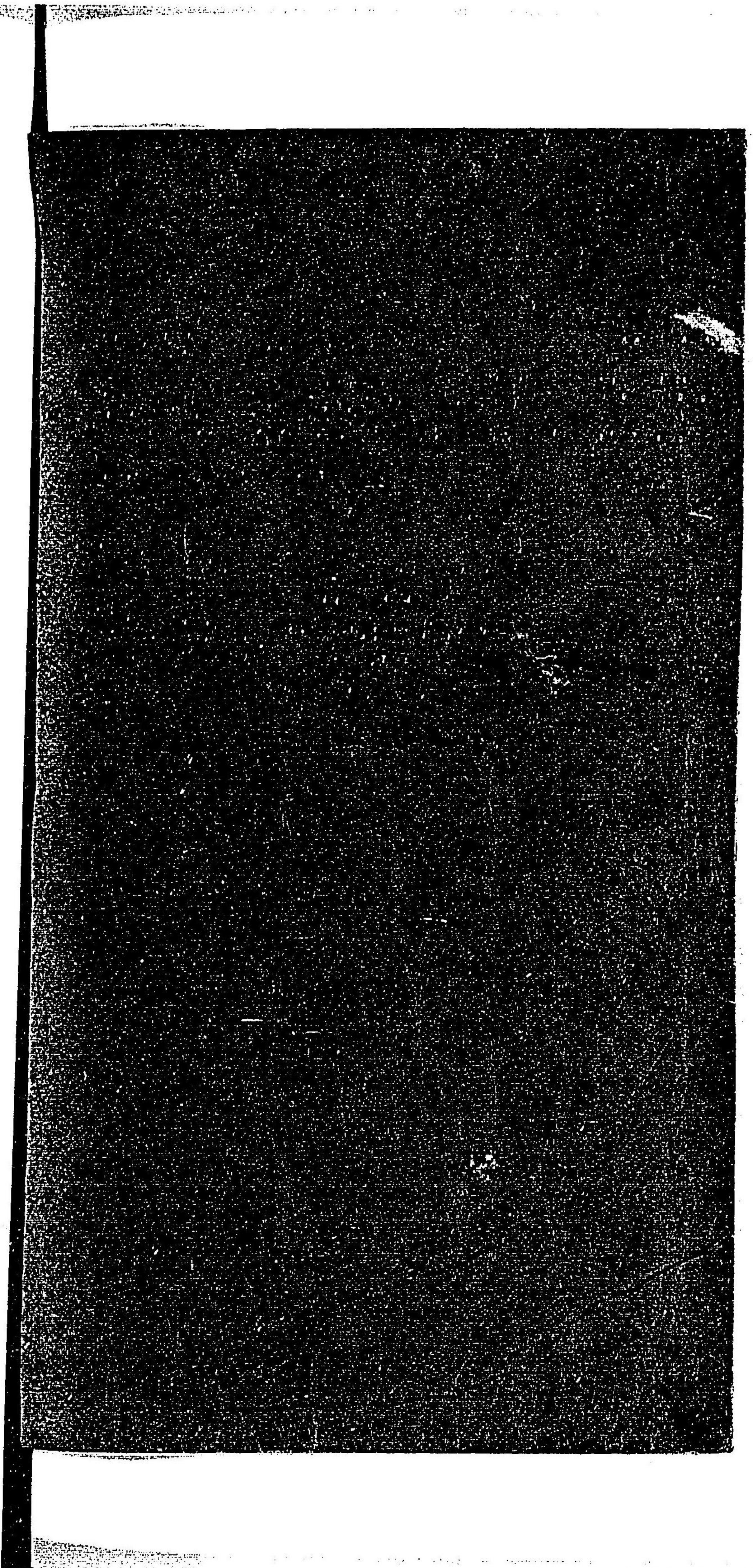
五拾九番地寄留

山口縣士族

壬









北村氏遺稿

27  
143

099364-000-2

67-143

北村氏遺稿

北村 勝成/著

M13

DBV-1823

